ー金の卵シリーズー

ゆりかもめ

作　三浦　実夫

◆登場人物◆

結城　真人（五五歳）元大手出版社のオーナー
北里　憐子（二四歳）風俗嬢
谷川　譲二（二四歳）ロックバンドのリーダー・

◆舞台設定◆

バブル崩壊後の一九九五年。
お台場海浜公園の夏。海が一望できる砂浜の一角。舞台中央奥に真っ赤な自動販売機と、空き缶用のボックス。その横に朱塗り木製ベンチが一脚、上手には公衆電話ボックスとトイレ。その横に水飲み場が見える。

一九九五年　春　お台場海浜公園

のどかな春の昼下がり。静かなさざ波の音が聞こえる。
北国から飛来して越冬したユリカモメが、浜辺に白い羽を休め群れている。

上手から背広の上着と、鞄を抱えた結城が現れる。
無精髭が伸びて大分くたびれた様子だ。上着と鞄をベンチに放り、自販機のチリ銭口を探るが、成果なく辺りを物色して廻る。ポイ捨て煙草を拾ってボックスから空缶を出してベンチに座り、ライターで煙草に火を付ける。
ピー、ピー、ピー、ピー。
ベンチからポケベルのコール音が鳴る。
結城、無視して海を眺め続ける。
クワーッ。クワーッ！
カモメの鳴き声に上空を仰ぎ見る。

結城　カモメ…。

下手から短パンの憐子が現れる。
小さなバッグを背負い、ストロー付き「M」印のカップを持っている。

結城を一瞥して、自販機に寄り掛かって、携帯電話をプッシュする。
トルー、トルー、トルー。
鳴り続けて留守電に切り替わる。

留守電の音声　こちらはＮＴＴドコモです。おかけになった電話は、電源が入っていないか、電波が届かない場所にある為かかりません…。

憐子、携帯電話を切り、チュー、チューッ！
と音を発てカップの飲物を啜る。
結城、憐子に気づいて声をかける。

結城　待ち合わせかい？
憐子　（無視）……。
結城　いや、私も待ち合わせでね…。
憐子　（面倒くさそうに）だから？
結城　いや。何でもない。何でもないよ。
憐子　だって。待ち合わせなんだろ？
結城　それが、待ち人じゃないんでね。
憐子　じゃあ。何を待ってるの？

結城　運命かな…。
憐子　運命って待つものなんだ？
結城　今の私にはね…。
憐子　で、その運命は何時くるの？
結城　十日は待ったがね…。
憐子　ふーん。こんな所で十日も？
結城　君の待ち人は？
憐子　運命の人ならいいけどね。
結城　と、言うと？
憐子　カ・レ・シ…。
結城　運命の人じゃないの？
憐子　明日、ここでライブやるんだ。
結城　えっ。この公園でかい？
憐子　今日はその下見。「景気わりーし、世の中病んでっからよ。思いっきしロックロールしてーんだよ！」だって…。
結城　ロックか、いいなあ。
憐子　おじさん、ロック好きなの？
結城　ああ。エルビス・プレスリーから始まってチェック・ベリーにバディー・ホリー。ビートルズ、イーグルスときてピンクフロイド…。

憐子　私、ロックは大嫌い…。
結城　えっ。だってライブやるんだろ？
憐子　私は下見に来ただけ。大体さ一銭にもならない、自己満足のゲリラライブに、何の意味があのって感じ。
結城　ライブに意味が必要かい？
憐子　夢ばっか追っかけてさ。馬鹿だよ。
結城　でも、夢を持つのは大切だよ。音楽で世界を変えられる。そう信じた連中がいた。何ていうかそのスピリツと魂…あ、スピリッツと魂は同じか…。

と、ベンチの上着を羽織り、鞄を抱えて去りかかる。

憐子　どこ行くの？
結城　ライブ会場じゃ、寝てる分けにいかんだろう？
憐子　居なよ。ロック好きなんだろう。
結城　いや、静かなところがいいんだ…。
憐子　（強引に）はい。これがライブのチラシよ！

結城、受けとりチラシに目を通す。

結城　結構なバンドが出るんだね。
憐子　どれも、中途半端なバンドだけどね。
結城　それで、君のカ・レ・シは？
憐子　（チラシを指し）ジャキーン！
結城　JOGI(G)。ハンサムじゃないの。
憐子　譲二が？　どう見てもガチャピンだよ。
結城　ガチャピン？　ああ、緑のデカイ…。で、君はどのステージで歌うんだい？
憐子　歌う分けないじゃん。ロックは嫌いなんだから。
結城　いい声してるのになあ…。
憐子　何それ。お世辞？
結城　いや。本当にいい声しているよ。
憐子　所で、おじさんは何屋さんなの？
結城　うむ。今は無職屋さんだな。
憐子　ふーん。新米のホームレスかあ？
結城　ああ、今風に言えばそうなるね。
憐子　で、このベンチが仮の宿ってわけ？
結城　仮ならいいがね…。
憐子　それで、運命を待っている…。

憐子、チュチューーッ！　と飲料水を飲み干してボックスに向かう。

結城　ちょ、ちょっと。待ったーっ！

憐子　えーっ。何よ急に？

結城　そのカップ。貰えるかな…。

憐子　えーっ。だって空だよ？

結城　（カップを奪い）空でいいんだ空で…。

と、水飲み場に走り蛇口からコップに水を注ぐ。

憐子、ベンチの鞄と上着を見る。

憐子　ルイ・ビトンにヴェルサーチ…。

結城、カップを揺すり戻ってくる。

ベンチに座り喉を鳴らして氷水を飲む。

結城　ああ、美味い。森羅万象、水は正に生命の源だな…。

憐子　ふーん。それで氷かあ？

結城　水道水は生温くてね。氷水で生き返えったよ。

憐子　（自販機を指し）お金ないの？
結城　若い三人組に絡まれてね。
憐子　えっ。チーマー？
結城　と言うのかな。財布ごと持って行かれた。
憐子　えっ。キャッシュカードは？
結城　それが結構な迫力でね。
憐子　えーっ。暗証番号教えちゃったの？
結城　どうせ取引中止のカードだ。彼らに八つ当たりされたＡＴＭには、悪いことをしたようだがね。
憐子　ははは。気の毒なチーマー。
結城　（テレフォンカードを見せて）これが全財産だ。
憐子　五千円のオニューじゃない！
結城　名刺入れに紛れていてね…。
憐子　これ。金券ショップで換金できるよ。
結城　なるほど。その手があったか…。

下手から、ギターケースを抱えた、譲二が現れ自販機の前に佇む。

結城　三千円でどうかなあ？

憐子　いらなーい。
結城　じゃあ。二千五百円で？
憐子　公衆電話使わないもん。ジャジャジャーン！

結城に携帯電話を突きつける。

結城　おっ。最新兵器の携帯電話かあ。
憐子　おじさん。携帯電話持ってないの？
結城　（ポケベルを出し）これならあるがね。
憐子　へえー。ポケベルかあ。
結城　これがなかなか便利で、役に立つんだよ。
憐子　おじさん。家に帰んなよ！
結城　えっ。何だね急に？
憐子　家族に迎えに来て貰いなよ。そのテレカで電話してさ。
結城　運命と出会えたらね…。
憐子　運命と出会ったら、おじさんはどうなるの？

譲二がいきなりギターを奏でる。

憐子　あら。居たの？
譲二　ああ。居たよーっ！
憐子　何で携帯にでないの。こういう時の為に買ったのに！
譲二　使いかたが分からねーんだよ。（と、結城を睨んで）で、あんたは何者よ？
結城　ああ、通りすがりの浮浪者だな。
譲二　ふーん。通りすがりの浮浪者ねえ…。（と、ベンチを覗き）ヴェルサーチにルイス・ヴィトン…。
結城　うん。ルイス・ヴィトンねぇ？
譲二　何か言った？　うっ。おっさん臭せぇーな。
結城　どうも。お邪魔のようだね？
譲二　うん。邪魔だ！
憐子　ちょっと。何てこというのよ！
結城　いいんだ。話をしてくれて楽しかったよ。（と、鞄を手に立ち上がる）
憐子　何処に行くのよ？
結城　ちょっと、私も下見にね…。
憐子　何の下見よ？
結城　運命とのデートコースかな…。

と、背中を向けて上手に去る。

譲二　誰なんだよ。あの臭いおっさんは？
憐子　今流行りのホームレスよ。
譲二　嘘こけ。背広がヴェルサーチ、ルイ**ス・**ヴィトンの高級鞄だぜ。ホームレスなわけねーだろ？
憐子　まだ成りたてだってさ。
譲二　道理で。どんな事情か知らねーが、あの格好でホームレスなんてよ。まっく世の中が狂ってやがるぜ！
憐子　バブルの崩壊でリストラじゃないの？
譲二　へっ。いい気味さ。散々バブルで甘い汁吸って、弱い者いじめた罰があたったんだよ。天罰がよー。
憐子　だからって、おじさんの罪じゃないだろ！
譲二　ふん。そこら中に悪臭を振りまいてよ。それだけで十分に犯罪だよ。
憐子　よく言うわね。自分が悪臭を棚に上げて。
譲二　えーっ。俺のどこが臭いんだよ？
憐子　特に腋汁。強烈だよー。
譲二　えーっ。マジでマジでーっ！

と、譲二が両腋の下を嗅ぎまくる。

憐子　もう。馬鹿じゃないの！
譲二　で、おっさんと何話してたんだ？
憐子　ありふれた世間話よ…。
譲二　ふーん。世間話ねえ？
憐子　何よ。引っかかった言い方して？
譲二　何か、値段の交渉してただろう？
憐子　はあ？　何の値段よ。
譲二　二千円とか三千円とか、商売の交渉したんだろう？
憐子　（血相が変わり）馬鹿ーっ！

と、憐子が譲二の頬にビンタを喰らわす。

憐子　だったら。どうだって言うのよ！
譲二　俺、憐子の分も稼ぐからさあ。
憐子　自分が食うのもやっとで、どうやって私の分を稼ぐのよ！
譲二　バイトを掛け持って、シャカリキに稼ぎまくる。
憐子　そういうのは、稼いでから言って！
譲二　俺さ。今の憐子を見ていると、何か落ち着かねえんだよ。

憐子　有難う、譲二。でもその話はしない約束だよ！
譲二　分かってるよ。分かっているけどさあ。
憐子　そんなことより、明日はビックライブやって、不景気で病んでるバンド仲間を救うんだろう？
譲二　そ、そうだよそうだよ。こんな不景気で暗い世の中なんかぶっ飛ばしてよ。ラブ＆ピースにしてやるぜ。ロックンロール！　（と、拳を突き上げる）
憐子　はい。これが公園のマップだよ。
譲二　おお。サンキュー。
憐子　譲二、舞台は向こうにしよう。
譲二　何で。ここでいいだろう？
憐子　だって、ここはおじさんの住処だよ。
譲二　憐子よー。おっさんは関係ねーだろ？
憐子　（強く）いいから向こうにして！
譲二　何だか知らねぇが…まあ。いっか！

と、メジャーを出し図面を眺める。

憐子　譲二、何か冷たい物飲む？
譲二　ああ。冷え冷えのコーラがいいな…。

と、憐子に五百円玉を放る。
憐子、空中でキャッチして自販機へ。

憐子　あーっ。やっちゃったーっ！

と、五百円玉を挿入口に入れ損ねて、しゃがみ込んで自販機の下を覗く。

譲二　（憐子の側に来て）何だ。どうしたよ？
憐子　五百円玉。落としちゃったー。
譲二　えーっ。またかよー。
憐子　だって手が滑ったんだもん。
譲二　ったく、コーラ一本買うのによー。
憐子　一本だろうが百本だろうが、落とす時は落とすの！
譲二　本数の問題じゃねけどさ。ギターリストは指先の神経を研ぎしましてだな。
憐子　私、ギタリストじゃないしー。
譲二　いいから退いて。（と、自販機の前に腹這いになり）どっちに転がった？
憐子　右かな左かな。よく分かんないよー。

譲二　ああ、何も見えね。（と、憐子に百円ライターを渡し）これで照らしてくれ。

譲二、メジャーを延ばして身構える。
憐子、譲二の鼻先でライターを擦る。

譲二　アチッアチッアチィーよ。お前よーっ！　（と、跳ね起きて髪の毛を払う）
憐子　あっ。ごめーん！
譲二　前髪、燃えちゃったじゃねぇか！
憐子　本当だ。パーマ掛かってるー。
譲二　馬鹿。感心してんじゃねーよ！
憐子　へへっ。ごめんちゃーい。
譲二　いいから。離れて照らせ離れてよー。
憐子　はーい。（と、ライターを擦る）あれ。あれーっ！
譲二　どうした。早く照らせよ！
憐子　ライター、ガス切れみたーい。
譲二　えーっ。何だよ肝腎な時によーっ！

と、譲二がメジャーで自販機の下を、滅多矢鱈に引っ掻き出す。
粉塵とゴミに混じってエロ本が出てくる。

譲二　おっ。デラべっぴん。（と、グラビアを開き）すげぇ。ヘアー諸見えだぜ！
憐子　馬鹿。コインはどうしたのよ！
譲二　憐子、こりゃ無理だよ。
憐子　えーっ。何でよー？
譲二　自販機を退かさねえと、五百円玉は取り出せねえよ。
憐子　まだ、何も努力してないじゃない？
譲二　やっただろ。こんだけ引っ掻き回して出てこねえんだ。諦めるしかねーよ。
憐子　まったく貧乏人のくせに、金を粗末にするんだから！
譲二　落としたのはお前だろう？
憐子　いいから貸して！

と、譲二からメジャーをひったくり、自販機の下を引っ掻き回す。

譲二　たかが五百円玉一つに、ケチケチすんなよ。
憐子　よく言うわね。自分のケチを棚に上げて！
譲二　俺のどこがケチだよ？
憐子　夕べのホテル代を払ったの私だからね！
譲二　誘ったのはお前だろう？

憐子　譲二が泣きべそかいてたからだろ！
譲二　その分サービスしたじゃねぇか。
憐子　はあ。何がサービスよ？
譲二　そのオッパイを入念にだな…。
憐子　それのどこがサービスよ！
譲二　サービスだよ。大サービスだよっ！
憐子　もーっ、嫌だ。今日こそ別れる！

と、譲二のエロ本を叩き落とす。
エロ本がバラけてとっ散らかる。

譲二　嫌だ。俺は絶対に別れねえ！
憐子　だったら。謝って！
譲二　謝る？　何で謝るんだよ？
憐子　そんなの知るか。とにかく謝って！
譲二　何なんだよ。まったくよー。（と、口籠り）ごめんちゃーい！
憐子　いいから。早く下見に行ってよ！
譲二　あーあ。超面倒くせえー。

譲二、エロ本を拾って下手に去る。

憐子　ああーーっ。もおおおーーーっ！

と、空き缶ボックスを蹴倒す。
空き缶が四方八方にとっ散らかる。
憐子、ベンチに座り肩を震わせる。
そこへ、上手から結城が現れる。

結城　どうしたんだい？
憐子　別にー。
結城　カ・レ・シは？
憐子　知らなーい。
結城　喧嘩かい？
憐子　あんな糞ガキ。喧嘩にもならないよ！
結城　いいカップルに見えたがねえ。

と、結城が空き缶をボックスに回収を始める。
憐子も仕方なく一緒に空き缶を拾う。

結城　付き合い。長いのかい？
憐子　幼馴染なだけさ…。
結城　結婚しないの？
憐子　譲二と？　まさか無い無い！
結城　何でそう言いきれるんだい？
憐子　だって万年バイトの、貧乏ギターリストだよ。結婚なんて考えられないよ。
結城　好きなんだろう？
憐子　さあ。どうなんだろう。
結城　嫌いじゃないな？

と、空き缶の回収が終了。
結城、ボックスを戻して、水飲み場で手を洗う。
憐子、ベンチに座ってガムを噛む。

憐子　結婚かあ…。

憐子、空を仰いでガムを膨らませる。
結城が水飲み場から戻ってくる。

憐子　おじさん。ガム食べる？
結城　おっ、懐かしいねぇ風船ガム。
憐子　ガムを噛んでいると、嫌なこと忘れられるんだ…。
結城　嫌なことがあるのかい？
憐子　おじさん。嫌なことないの？
結城　右も左も真っ暗闇で、嫌な事だらけさ…。

と、二人が海を眺めて風船ガムを膨らます。

憐子　おじさん。私の職業、何だと思う？
結城　（服装を観察して）アパレル関係かな？
憐子　外れー。ヒントは衣食住以外の職業よ。
結城　衣食住以外ねえ。私には想像つかんなあ。
憐子　ズバリ。今流行りの風俗嬢さ！
結城　ええーっ！（と、一瞬ずっこける）
憐子　ははは、おじさん。ビビった！
結城　ビビるだろう普通は。君のようなお嬢さんが風俗嬢なんて…。
憐子　手っ取り早く、金が稼げるからさ…。

結城　金がそんなに大事かい？
憐子　当たり前じゃん。金があれば誰も苦しまない。金がないから金に縛られる。
　　金さえあればみんなハッピーになれるんだ！
結城　否定は出来んな。それで君はハッピーなのかい？
憐子　おじさんには、どう見える？
結城　幸せだと嬉しいがね…。

と、暫し無言で海を眺める二人。
クワーッ。クワーッ！　カモメの声。

憐子　あ、そうだ。おじさん！
結城　何だい。いきなり？
憐子　ライター。持ってない？
結城　持ってるけど、煙草はないよ…。

と、結城がライターを出して渡す。

憐子　（ライターを凝視して）ちょっとー。これデュポンじゃん！
結城　ああ、貰い物だがね。

憐子　おじさん。相当バブってたね？
結城　それ、君にあげるよ。
憐子　はあ？　何でそうなるの？
結城　私には無用の長物だよ。
憐子　こんな高価な物は貰えないよ。でも借りるね！

と、自販機の下をライターで照らす。

結城　おいおい。自販機を燃やすきかい？
憐子　さっき、五百円玉を落としちゃったの。
結城　えっ。それは大金だあ。
憐子　やっぱし、何も見えないよー。
結城　どれどれ。（と、しゃがんで覗き）ああ、照らす角度が悪いんだな。奥の隙間から照らして…。

と、結城が自販機の前に腹這いになる。
憐子、奥からライターを照らす。

結城　おっ。キラキラ光ってるよ。

憐子　えっ。ホントに？
結城　ああ。満天の星空のようだよ。
憐子　光ってるって何だろう？
結城　取り出してみれば、ハッキリするさ…。

と、ベンチに戻り鞄をから、ドラムのスティックを取り出す。
両手でカチカチ打ち鳴らして戻ってくる。

憐子　何々、おじさん。ドラマーなの？
結城　若かりし頃に少しね…。

と、スティックの一本を凛子へ渡し、噛んでるガムを吐いて、スティックの先端にクルクルと巻きつける。

結城　君のガムもスティックに巻いて…。
憐子　えーっ。これで何をすんの？
結城　いいから早くして！
憐子　はーい。（と、ガムを巻き）これでどう？
結城　おお。上出来上出来。ライターを照らして！

憐子　はーい。（と、自販機の奥に屈む）
結城　よし。細工は流々見てろよーっと！

と、自販機の前の腹ばい、下にスティックを差し込む。
慎重に引き出した先に、五百円玉が光っている。

結城　はい。君が落とした五百円玉だよ！
憐子　えっ、本当に。凄い凄ーいっ！
結城　これはホンの序の口だよ。
憐子　えっ。どう言うこと？
結城　光っているのは、全部コインだよ。
憐子　えーっ。まじでーっ！
結城　ああ、ま・じ・で。長いこと自販機の下で眠ってたのが、引っ掻き回されて目を覚したんだな。これから引き出すお宝はどうするかね？
憐子　どうするって？
結城　普通。落し物は交番に届けるだろう？
憐子　でも落とし主不明のバラ銭だよ。警察が困るんじゃないの？
結城　成る程ー。じゃあ、二人で山分けとするか？
憐子　いいねいいね。山分けいいねーっ！

結城　よーし、商談成立だ。お宝の回収だよーっ！

と、結城がスティックで次々とコインを取り出す。

憐子　何でこんな所にお金があるんだろう？

結城　バブルの名残だな。あの時代は幾らでも金を稼げたからね。自販機の下に潜ったバラ銭なんか、誰も拾わなかったのさ。

憐子　えーっ。もったいなーい。

結城　今は十円玉も拾えないがね。

憐子　おじさんは賢いね。ガム使って回収なんて。

結城　子供のころ遊んだ、トリモチの要領さ。

憐子　えっ。トリモチって？

結城　黐（モチ）ノ木から採れる液体でね。小鳥を捕まえる遊び道具だよ。

憐子　ふーん。それでトリモチかあ？

鋭いカモメの啼き声がよぎる。

結城　木枯らしが吹く季節なると、夜明け前にザクザクと、霜柱を踏んで裏山に登って、手頃な松の樹を探して、囮の小鳥を入れた鳥籠を隠してね。枝振りの

いい山漆にトリモチを塗って、竹竿に括りつけて松の側に立てて、掘っ立て小屋の炉で焼いた、熱々の焼き芋を喰いながら、じーっと夜明けを待つ…。

憐子　何だか面白そうね。

結城　ああ。面白いよー。三番鶏が鳴いて陽が昇ると、囮の小鳥が鳴きだして、廻りの山から小鳥を呼び寄せる。飛んで来た小鳥の群れは、囮の姿が見えないから、トリモチを塗った漆の枝に止まる…。

憐子　えーっ。それでそれで！

結城　トリモチに触れたが最後。小鳥の足や羽に絡まって、身動きが出来なくなる。多い時は一度に十数羽も獲れてね…。

憐子　えーっ。そんなにー？

結城　元気のいい小鳥は、次の囮に取って置き、形がいいのは町の小鳥屋に売る。これがいい小遣い稼ぎなってね。「冒険王」や「少年画報」を買って、みんなで回し読みをしてね。

憐子　それで、残った小鳥はどうすの？

結城　羽を毟って、唐揚げにして食べちゃう。

憐子　えーっ。食べちゃうのーっ！

結城　ああ。食べちゃう！　あの当時は食糧難の時代でね。肉なんか滅多に食えれえない。野鳥や野兎の肉は貴重なタンパク源で、腹っ減らすの子供たちには、何よりのご馳走だったよ。

憐子　可哀想な小鳥ちゃん。
結城　今は金がないとソバ一杯も食えない。はい。最後のお宝だよー。
憐子　（寄って来て）えーっ。こんなにあったのーっ！

と、憐子がコインを数え始める。
結城、ベンチに座りスティックの手入れする。
長い間。
憐子、両手にコインを持ち結城の前へ。

憐子　おじさーん。全部で五千円越えたよー。
結城　おお。そんなにあったかい？
憐子　はい。これがおじさんの取り分だよ。
結城　（五百円玉を二つ摘み）これで一息つけるぞ！
憐子　えっ。何でよ？
結城　いや。私はこれだけで十分だよ。
憐子　駄目ー。山分けする約束だよ！

憐子、強引に結城のポケットにコインを入れる。

憐子　おじさん。小腹空かないかい？
結城　小腹どころかお腹と、背中がくっつきそうだよ。
憐子　えーっ。何も食べてないの？
結城　この数日、財布取られて断食状態だったからね。
憐子　売店で弁当買ってくる。おじさん。何がいい？
結城　何があるのかな？
憐子　ホットドックとかフライドポテト。いわゆるジャンクフードだね。
結城　唐揚げはないのかね？
憐子　あるある。いいねいいね。トリモチで唐揚いいねー。（と、上手に走る）
結城　あ、君。お金お金っ！
憐子の声　唐揚げは私の奢りだよー。

結城、ベンチ前に空き缶ボックスを据える。
クワーッ。クワーッ！　カモメの声。
空き缶ボックスをドラムに見立て、リズム良くスティックで叩きだす。
下手から譲二が現れて、暫く結城のバチ捌きを眺める。

譲二　おっさん！
結城　やあ。お帰りー。

譲二　おっさん。ドラマーなのか？
結城　若かりしころ少し。下手の横好きでね…。
譲二　ふーん。下手の横好きねぇ…で、彼奴どこに行ったか知らね？
結城　彼奴って誰よ？
譲二　決まってるだろ。俺の女だよ！
結城　君の女ねえ…。
譲二　一緒に居たんだろう？
結城　ああ、一緒に居たよ。だがその態度じゃ教えられんな。
譲二　へえー。どんな態度なら教えてくれんの？
結城　人に物を尋ねるには、礼儀というモノがあるだろう？
譲二　なるヘソ礼儀ねー。それじゃあさ、ピンポーンって言えよ。
結城　ピンポーン？　卓球のことかい？
譲二　いいから。ピンポーンって言えって！
結城　馬鹿馬鹿しいが、はい、ピンポーン！
譲二　はい喜んでー。ようこそ「やる気茶屋」へ！　ところでお客さん。ちょっとお尋ねしますが、ここで僕と待ち合わせていた女性。どこへ行ったかご存知ないですか？　と、でも言えってのかよ！
結城　やれば出来るじゃない？
譲二　毎日バイトで鍛えてっからよ。で、彼奴はどこ行ったの？

結城　売店に弁当を買いに行ったよ。
譲二　えっ、弁当。俺の分は？
結城　そんなの私が知るか！
譲二　で、何時からドラムを叩いてんの？
結城　まだ君が生まれる前だな。
譲二　俺の持論だけどよ。太鼓叩きにゃ悪い奴はいねえ。そうだろう？
結城　分かってるじゃない。何十年も叩いてないがね。
譲二　へー。昔とった衣笠ってやつか？
結城　それを言うなら、昔とった杵柄が正解だよ。
譲二　おおっ、いい突っ込みじゃないの。ところでおっさんは、何者なんだい？
結城　見ての通りの、今流行りのホームレスだ。
譲二　嘘こけ。ヴェルサーチの背広に、ルイ**ス**・ヴィトンの鞄でよ。どこから見みたって、ホームレスには見えねえ。
結城　じゃあ。何に見えるのかね？
譲二　うーん。そうだなあ。（と、結城を眺めて指を鳴らし）役所広司！
結城　そう言う意味じゃないだろう。
譲二　あんたはドラマーだ。悪い奴じゃない。
結城　ドラマーが善人という、証がどこにあるんだね？
譲二　俺はそう決めてる。だからさライブが終わるまで、ここを退去してくれない？

結城　何でだい。ここは一千万都民が憩う公園だよ。私が居てはいけない、理由がどこにあるんだね？
譲二　あんた。本当は自殺願望者だろう？
結城　随分、ダイレクトな言い方だね。
譲二　年に三万人も自殺するご時世だ。おっさんの風体を見りゃ察しがつくさ。
結城　なるほど。君にはそう見えるか？
譲二　困るんだよ。首吊りでもされてライブがお釈迦なったら、洒落にならねーよ。
結城　面白いじゃない。ロックのライブで自殺ショー。
譲二　おーっ。それはロックだな！
結城　ははは。悪いジョークだがね。
譲二　ボケはイマイチだな。おっさんさあ。マジで彼奴が動揺してんだよ。
結城　えっ。どういう意味？
譲二　似てんだよあんた。その雰囲気がさ…。
結城　役所広司にかい？
譲二　ちげえーよっ！
結城　えーっ。違うのかい？
譲二　彼奴の親父さんに似てんだよ！
結城　えっ。彼女のお父さんと？
譲二　だからさ。あんたが居ると困るんだよ。一日でいいんだ一日で、どっかに行

ってくれない？

そこへ、ビニール袋を下げた憐子が現れる。

憐子　おじさん。熱々の唐揚げあだよー。

結城　あっ。有難う。（と、受け取り）おほほっ。これはご馳走だあ。

譲二　チッ。タイミングが悪りー。

憐子　（譲二を睨み）何か言った？

譲二　何でもねーよ。で、俺の弁当は？

憐子　はい。譲二の好きな、アメリカンドッグだよ。

譲二　有難てぇ。やっぱ俺の憐子だぜ！

憐子　冷めない内に食べよー。

と、先を争うようにベンチに座り、何故か結城が二人に挟まれている。

結城、夢中で唐揚げを食らう。

穏やかなカモメの鳴き声。春の潮風が心地いい。

結城　旨い！　今時の唐揚げ旨いねえ。

憐子　おじさん。食べたことないの？

結城　始めてだ。生き返った心地だよ。
憐子　はい。喉越し爽やかな「爽健美茶」だよ。
結城　おっ、ありがとう。（と、キュップを外して飲み）ああ。美味い。唐揚げにぴったりの飲み心地だ…。
譲二　その「爽健美茶」のロゴは、憐子のおやっさんが…。
憐子　譲二。余計なこと言わないで！
譲二　あ、いけねぇ。
譲二　差し支えなければでいいんだが、一つ聞いてもいいかなあ？
憐子　いいけど。どんなこと？
結城　君のお父さん。何の仕事してるんだい？
憐子　えっ。何で父の仕事なのよ！
譲二　お、おっさん。その話は拙いよ！
結城　えっ。何でかね？　（と、二人を交互に見て）いや差し支えなければで…どうも差し支えているようだな…。

と、結城と憐子が同時に立ち上がり、互いに不規則に動き打つかり合う。

凛子　（譲二を押しのけ）退いて！
譲二　何処に行くんだよ！

憐子　泣いてくる！　（と、上手に走り去る）
譲二　もー。だから、どっかに行ってくれって頼んだのによー。まったく察しの悪いおっさんだぜ！
結城　何がまずかったんだい？
譲二　彼奴に親っさんの話は、タブーなんだよ。
結城　えっ。どう言うこと？
譲二　話せば長げー話でよ。あいつの親父さん。グラフィック・デザイン会社やってよ。何人もデザイナーや写植職人を使って、羽振りが良くてさ…。
結城　ほう。グラフィックの会社をね…。
結城　あいつは学校の成績は何時もトップで、「ゴクミ」に似て歌が上手くてよ。近所じゃ下町の太陽と評判のお嬢でよ。本来は俺みてーなアホと、一緒にいるような奴じゃないんだよ…。
結城　成る程。それが何で一緒にいるんだい？
譲二　その点、俺んちは親父が蒸発して、超がつく貧乏一家でよ。近所の悪ガキとバンド組んで、ライブハウスでトラブって、喧嘩に明け暮れる毎日でさ…。
結城　それでギターリスト…。
譲二　そんな荒んだ生活を見兼ねた、憐子の親父さんが俺を工房に呼んでよ。吉幾三の『俺ら東京さ行くだ』をリクエストして、俺に何度もギターを弾かせて、野太い東北訛で歌ってよ。俺の手を掴んでながめて、「器用な手だな。デザ

イナーにならねが？」って…俺、何だか胸が熱くなってさ…。

結城　それで、デザイナーなのか？

譲二　俺にそんな根性はねーよ。

結城　何で彼女はそんな優しい、お父さんがタブーなんだい？

譲二　親父さん。バブルで会社倒産してさ。自殺しちまったんだよ…。

結城　えっ。彼女のお父さんが…。

譲二　「私が父を死なせた！」って心を塞いでるんだよ。

結城　そうか。そういう事情とは知らず、悪いことをしたな…。

と、深い溜め息吐いて空を仰ぐ結城。

譲二　家族の為に掛けていた、生命保険が免責期間内でよ。家も事務所も借金の形に取られてよ。そっから憐子が可笑しくなって、大好きだった歌手の道を捨ててよー。

結城　彼女。歌手志望だったのか？

譲二　彼奴は。いい声をしてるんだぜ！

結城　ああ。いい声してるよ。

譲二　だのにだのによー。何で風俗嬢なんだよ。糞、糞、糞ーーっ！　ふざけんなーーーっ！　（と、自販機を何度も蹴り上げ）おっさんさあ。何なんだろう

ね。俺、何んで無力なんだろう。好きな女一人も守れねーでよ。こんなの全然ロックンロールじゃねえよなーっ！（自販機に抱きついて泣く）

結城　無力なのは私も同じだよ。

と、遠くの海を眺める結城。

譲二、ベンチに座ってギターの音源調整を始める。

譲二　おっさん。生まれ故郷はどこだい？

結城　筑波山麓の辺鄙な村だ。

譲二　へー。あのガマの油で有名な？

結城　子供の頃は戦争中でね。父は外地に出征してたから、春は朝早くから馬の鼻っ面引いて、暗くなるまで田起こしや田植えの毎日…。

譲二　へー。案外苦労してるんだ？

結城　父が復員してきた時は嬉しくて一晩中はしゃぎ回ったものさ。

譲二　長げー間。居ねーんじゃ無理ねえや。

結城　ところが、それも束の間の喜びでね…。

譲二　へえー。何があったの？

上手から憐子が現れるが、二人の様子に自販機の裏に隠れる。

結城　もともと文学好きだった父は、百姓仕事をそっち退けで、戦友と組んで近隣の農家から米を調達して、トラックで東京の闇市に持ち込み、荒稼ぎで稼いだ資金を元手に、神田の古い出版社を買い取った…。戦時中は戦争一辺倒で、娯楽本などは発禁だったから、活字に餓えていた人々の求めが、空前の出版ブームが起きてね。父の会社もたちまちの内に、中堅の出版社に伸し上がって、白山の高台に豪邸を買いとって、先祖代々に渡って耕してきた、筑波の田畑を処分して、家族を東京に呼びよせた…。

譲二　流石は軍隊上がり。遣ることが半端ねーや！

結城　戦後のドサクサの成せる業さ。それだけに父は独善的な男でね。家には充分な金を送ってくるが、外に愛人を囲って家には滅多に帰らない…。

譲二　金を送ってくれりゃあよ。愛人の一人や二人を囲うのは、男の甲斐性つうもんじゃねーの？

結城　確かに父が送ってくる金で、何不自由ない青春を過ごせたがね…。

譲二　それ見ろ。贅沢言いやがってよ！

結城　大学生のころ洋楽に出会ってね。すっかりロックの虜になって、ドラ息子仲間とバンドを組んで、学業はそっち退けの、コンサート活動の毎日でね…。

譲二　成る程ねぇ。それであのスティック捌きか。

結城　そのバンドが評判を呼んでね。芸能事務所からプロデビューの話がきた。そ

こで有頂天になった仲間と、歌舞伎町で路上ライブをやって、やくざとトラブって警察に世話なってね…。

譲二　そりゃ凄げーや！　ロックンロールじゃないのー。

結城　それが大学出たら出版社にと考えていた父は、バンドのメンバーを金で籠絡して、ライブ会場で解散を宣言させてね…。

譲二　えーっ。プロのデビューはどうなったの？

結城　ライブ会場で大暴れしたが、誰にも相手にされなくてね。ヤケを起こして家を飛び出しみたものの、世間知らずの若造に何が出来る分けもなく、結局は父の出版社に入社させられた…。

譲二　情けねー。全然ロックンロールじゃねーじゃん！

結城　まったく、人生最大の大敗北さ…。

トルー、トルー。と携帯のコール音。

譲二　あれ？　な、何だ何だ？

結城　携帯電話のコール音だな…。

譲二　ちげーよ！

結城　尻のポケットがブルブルしてる。

譲二　（ポケットに手をやり）道理でムズムズすると思ったぜ。（と、携帯電話を

出し）あれ、これはどこを押せやいいんだ？

結城　（覗いて）緑のボタンだな。多分…。

譲二　おっ、本当だ。サンキュー。（と、親指を立て）もしもし…あ、憐子？　何、帰る…いま何処にいるんだよ。えっ、トイレの前…どこのトイレだよ？　ん、分かった。そこへ行くから待ってろ。えっ。おっさん…居るよ。いらねえだろそんなモノ…あーあ。分かった分かった分かったよーっ！（と、ボタンを押すが切れない）どうなってんだよ。これはよー？

結城　赤く点滅してるボタンだな。多分…。

譲二　あ、切れたよ…。おっさん。憐子がポケベルの番号教えろって…。

結城　えっ。何でだい？

譲二　そんなの知らねえーよ！

結城　（名刺入れから名刺を出して）この番号がポケベル専用だ…。

譲二　えーっ。（と、驚いて）おっさん。マジかよーっ！

結城　名刺がどうかしたかい？

譲二　大層なご身分じゃないのー。

結城　昔の肩書きだ。何の役にもたたんよ。

譲二　ふーん。そうかよ！

と、名刺をポケットに入れ、ギターをケースに仕舞う。

結城　帰るのかい？
譲二　明日の準備あっからよ！
結城　ライブ。楽しめよ！
譲二　ああ。あたぼーよ！
結城　それと、憐子ちゃんに優しくな。
譲二　あたぼーよ！
結城　ああ。それともう一つ…。
譲二　何だよ。まだ何かあんのかよ！
結城　鞄…。ルイ・ヴィトンな…。
譲二　はあー？
結城　いや何でも無い何でもないよ…。
譲二　ケッ、嫌味を言いやがって…。（と、仕舞いかけたギターを出し）おっさん。
　　俺のロック魂を聴いてくれかい？
結城　いいねえ。何を歌うんだい？
譲二　聴いてりゃあ。分かるよ！

と、『スペース・オディティ』を熱唱する。

譲二　ロックンロール！　（と、拳を突き上げる）おっさん。俺のロック魂が届いたかい？

結城　ああ、格好いいね。ロック魂！

譲二　おっさん。明日のライブに来いよ！

結城　邪魔じゃないのかい？

譲二　ああ、邪魔だ。邪魔だけど来るべきだ！

譲二、ギターケースを肩に掛けて去る。

結城、ベンチで海を見つめる。

水辺にユリカモメが群れている。

自販機の陰から憐子が現れる。

憐子　おじさん…。

結城　あれ？　彼、行っちゃったよ。

憐子　譲二は煩いから居なくていいの…。

結城　えーっ。そうなのかい？

憐子　おじさん。私の父はね…。

結城　ああ、粗方のことは譲二君から聞いたよ。無理に話さなくていいよ。

憐子　私から、おじさんに直接話したいの！

結城　あー。それならいいがね…。

憐子　父は、東北のチベットと言われる、岩手の山奥から集団就職列車で出てきて、神田の図案工房に就職して、親方や兄弟子の下働きしながら、グラフィック・デザインの腕を磨いて、写植オペレーターの母と独立をしたのよ…。

結城　集団就職か。私と同じ世代だね…。

憐子　私が物心ついた頃にはデザイナーと、写植オペレーターの職人が大勢いて、朝早くから夜の遅くまで、「ガチャンガチャン」と写植機の音が響いて、工房中が活気に溢れていたのよ…。

結城　あの頃の印刷・出版業界は、写植全盛の時代だったからね。何処の路地裏からも、写植機の音が聞こえていた…。

憐子　父の魔法使いのような手から、様々なデザインのパッケージが、創り出されられるのが不思議でね。学校から帰るの楽しみだった…。

結城　お父さんは独立して、故郷に錦を飾たんだね…。

憐子　でも父は東北訛りが酷かったから、友達から「憐子のお父さん、何語を喋ってるのか分からない？」と言われて恥ずかしくてね。それで父に「標準語で話をして」と訴えたら、「地方訛りは東北人の誇りだよ」って、反対に説教されてね。

結城　当時は全国の若者が就職列車で、東京に集まっていたからね。様々な地方の方言が飛び交っていよ…。

憐子　当時のグラフィックのデザインは、デザイナーの手作業だったから父は、「集団就職で田舎から出てきた、学歴の無い俺らの出世は独立することだ」と言って、何人ものデザイナーを独立させてね…。

結城　お父さんは、懐が深い人だったんだ…。

憐子　母が打つ写植機の、リズミカルな音に目を覚まし、夜は子守歌替わりに眠るって、あの頃が一番幸せな時だった…。

と、憐子が遠くの海を眺める。

クワーッ。クワーッ！　鋭いカモメの声。

結城　世の中に物が溢れて金が余って、一億総中流時代が到来した。それでも人々の物欲を求めて、身の丈に合わない高価な着物や毛皮のコート、貴金属の装飾品などの、贅沢品にステータスを求めた。売り手の商品メーカーは、さらに人々のニーズを煽り、自社ブランドの販売促進に、テレビやラジオ、新聞、雑誌などの宣伝媒体に、潤沢な予算を注ぎ込んで、空前の宣伝広告ブームを巻き起こした。そんな最中に父が亡くなり、膨らみきったバブル経済が、何の予告も無く突然に崩壊した…。

憐子　バブル崩壊と同時にグラフィックの制作は、アメリカから上陸したマッキントッシュの「マック」が取って代わり、父と母が半生かけて築いてきた、ア

ナログの手仕事が一掃された。父と母は誰も居なくなった工房で、筆や烏口を握っていた手を、ドライバーとスパナに変えて、「憐子、これは俺と母さんが、半生を掛けた人生の解体だよ」と油塗れで写植機をバラしていた。

結城　コンピューター・パソコンの出現は、広告・デザインや印刷業界に限らず、全世界における今世紀最大の、「産業革命」だったからね…。

そこへ、トルルー、トルルー。憐子の携帯電話が鳴る。

憐子　いけない。譲二からだ！

結城　その容姿じゃ。相当怒ってるな？

憐子　違う違う違う…そこのトイレじゃない…今、そこに行くからそこに居て（と、携帯を切り）おじさん。明日もここにいてよ！

結城　ああ、ライブ楽しみに待っているよ。

憐子　（小指と小指に絡め）おじさん。指切りゲンマンだよ！

と、憐子が下手に走って去る。

廻りの景色が夕焼けに変わる。

結城　（小指を見て）指切りゲンマンか…。正直言って、あの頃はいい時代でした。

今日より明日、明日より明後日と、国中が活気に満ち溢れて、集団催眠にかかった夢遊病者のように働いて、無我夢中で欲望を満たした。勿論こんな時代が「永遠に続くわがけない」と心の片隅で思いながらも、そんな野暮を口にする暇がないほどの異常なエネルギーでしたからね…。金、金、金、金は人間の欲望を叶える万能薬で、人を亡者にする魔薬でもあってね…朝起きて洗面台の鏡を見ると、父に良く似た傲慢な顔の男が、ジーッと私を観ている。東京ブック出版取締役 結城真人…。

と、名刺を破り風に散らす。

夕景から満月の夜景に変わる。

結城　そろそろ、時間が来たようです。（と、両手にティックを握り伸びをし）ロックのライブか…。ふん。こちとら大人だい。ガキの遊びに付合えるか！（と、スティックを膝に当て）うおおーーっ！　（と、力込めるが折れず）い、痛ーい…。

と、蹌踉めいてとベンチに座り、上着を畳んで靴を脱いで脇に添える。

テレフォンカードを手に、電話ボックスに消える。

トルルー。トルルー。トルルー。

長く呼び出し音が続いて留守電に変わる。

留守電音声　ただいま留守にしております。恐れ入りますがご用のある方は、ピーッ。という音が鳴りましたら、三分以内に伝言をお話しください…。

ガチーャン！　受話器を置く音。
ピー、ピー、ピー、ピー。カードの残留音。
結城が電話ボックスから現れて、満月を仰ぎ観て上手に去る。
翌朝、朝焼けの静かな風景。
ザザザー、ザザザー。と渚に寄せる波の音。
遠くから様々な楽器の音が聞こえてくる。
ピー、ピー、ピー、ピー。
ベンチからポケベルの呼び出し音が響く。
下手から、携帯を掲げた憐子と譲二が現れる。

憐子　譲二、やっぱあい居ない！

憐子、携帯電話を切る。ポケベルの音がピタリと止む。

憐子　何処に行ったんだろう？
譲二　トイレじゃねーか？
憐子　靴を脱いでトイレに行く？
譲二　だよなー。
憐子　おじさーん。おじさーん！　（電話ボックスの中へ）
譲二　ケッ！　俺のロック魂が届かねか…。
憐子　譲二。これっ！　（と、テレカを手に出てくる）
譲二　何だ。テレカじゃねえか？
憐子　おじさんのテレカだよ！
譲二　何で分かるんだよ？
憐子　筑波山とガマのイラスト。
譲二　家族に最後の別れを、告げたかのかな？
憐子　ああ。帰るんじゃなかったよー。
譲二　憐子が心配する事じゃねーよ。
憐子　何で。おじさんが死ぬかも知れ無いんだよ？
譲二　人はそれぞれ事情があるんだ。それにおっさんは赤の他人だ。無理に関わっても、誰にも感謝されねぇよ！
憐子　赤の他人で感謝されなくても、見過ごして良い分けない！
譲二　憐子よー。あのおっさんは、憐子の親父さんじゃないんだ。親父さんは死ん

だんだよ。いい加減に現実を受け入れろよ！

憐子　うるさい。譲二に私の何が分かるの！

譲二　だったらよ…。（と、憐子を抱き締める）

憐子　馬鹿馬鹿。こんな時に何すんのよ！

譲二　俺、親父さんのトラウマを引き摺ってる、憐子を見ているのが辛れーんだよ。

憐子　だから何よ。譲二には関係ないだろ！

譲二　好きな歌をやめて風俗やって、シャカリキに金を稼いで、それで憐子が幸せならいいよ。でも俺にはそう見えねぇ。憐子の幸せは大好きな歌を、思いっきり歌ってる時だって、自分で気がついてんだろう？

憐子　うるさい。うるさい！　勝手なこと言うな！

譲二　勝手じゃねぇよ。気づかないふりして、何時までも逃げてんじゃねーよ。親父さんが死んだのは憐子のせいじゃねー。おっさんだって同じさ。あれ。俺は何を言ってんだ？　ああもう何を言ってるのか分かんねー。憐子、俺と結婚してくれーっ！

憐子　うぅーっ。馬鹿馬鹿、譲二の馬鹿野郎ーっ！

憐子、譲二の胸で激しく泣きじゃくる。

長いの間。

上手から、全身ずぶ濡れの頭に海藻が張り付いた、結城が二人の側をすり

抜けて下手に去る。

譲二　おい。今の…。
憐子　お、おじさん？
譲二　だよな…。
結城の声　あれーーーっ！（と、素っ頓狂な声がして戻ってくる）
憐子　おじさーん！
結城　はいー。何で君たちがいるんだ？
憐子　おじさんこそ、何をしてんのよ？
結城　何って？　えーっ。じゃあ君たちが…。糞ったれが、何てことをしてくれたんだよーっ！　（と、譲二の胸ぐらを掴む）
譲二　おっさん。イキナリ何すんだよっ！
結城　頼んでもいないのに、勝手に助けやがって！
譲二　はあ。何トチ狂ってんだよ。誰も助けてねーよ！
結城　じゃあ。何で私がここにいるんだ？
譲二　そんなの俺らが知るかよ！
憐子　おじさんは、自分で歩いて来たんだよ。
結城　（辺りを見て）えっ。そんなー？
譲二　何だよ。何も覚えてねーのかよ！

と、譲二が結城の手を振り払う。

結城、濡れたシャツに触って我に返る。

結城　あははは、そうかそうだったか…。足から腰…腰から胸…胸から首まで浸かり、足を深みに踏み出した途端に、目の前にふわふわーっ！　と白い閃光がキラめいて抱いていた石を手放した…。

憐子　おじさん。何ぶつぶつ言ってるの？

譲二　狂っちまったんじゃねか？

結城　はははは。あの白い閃光は波間に浮ぶ月の光だったか。ああ、何て何て情けないんだよー。（と、腰が砕けてその場にヘタる）

憐子　その月の閃光が、おじさんの運命変えたんだよ。

結城　えっ。月の閃光が私の運命を変えたあ？

憐子　おじさんが待ってた運命は、生命保険の免責期間でしょう？

結城　な、何でそんなことが、君に分かるんだ？

憐子　免責期間が過ぎれば、家族に保険金がおりる。そんなのおじさんの運命じゃないよ。（と、テレカを渡し）これで連絡して迎え来て貰いな！

譲二　憐子。そんな親切心はいらねぇよ。

憐子　えっ。何でよ？

譲二　（憐子に名刺を渡し）死にたい奴は死にやいいんだよ。なあ。「東京ブック出版」の社長さんよ…。

憐子　えっ。「東京ブック出版」って…。

譲二　親父さんを自殺に追いやった、会社の社長さんだよ！

憐子　代表取締役 結城真人。おじさんの肩書きなの！

結城　そうだが…君のお父さんに何の関係あるのかね？

譲二　憐子の親父さんの会社はよ。「東京ブック出版」オンリーの、デザインの下請けプロダクションだったよ！

結城　えーっ。何という会社名だい？

憐子　ふん。名乗ったところでよ。大手出版社のオーナーが、下請け会社なんか掌握してねぇだろ？

結城　大概の協力会社は掌握している…。

譲二　憐子。恨みの丈を打ちまけてやれよ！

結城　会社名を教えてくれ。何というプロダクションなんだ！

譲二　「北里デザイン企画」だよ…。

結城　えっ。あの神田川沿いの？

譲二　ふーん。覚えてるんだ？

結城　き、君は北里君のお嬢さんなのか？

譲二　一人娘の北里憐子だよ！

結城　そうか、そうだったのか。何てことなんだ何て…。北里君は父の出版社に入社して以来、デザイン制作のパートナーで、唯一信頼できる同志だったのに、何て馬鹿げた因果なんだよーっ！　（と、頭の海藻を叩きつける）「北里デザイン企画」はイラスト、レタリング、トレース、写植、版下フィニッシュ。全てが優秀な職人揃いで、いつも革新的なデザインに挑戦してくれた…。

憐子・譲二　……。

結城　なのにバブル経済の崩壊と同時に訪れた、ＩＴ革命による業界の様変わりに追い詰められ私は、社員のリストラを断行し、外注業者の整理に着手した。数ある下請業者を整理するために、最も優秀で頼りにしていた、「北里デザイン企画」を真っ先に切った…。それが君のお父さんの命を…ああ。済まない済まない。本当に済まないーっ！　（と、憐子の前に土下座する）

譲二　おっさん。土下座しても憐子の親父さんは、生き返りゃしねーよ！

結城　分かってる、分かっているさ。でもあの時はああするしか、道が無かったんだよー。ううううーーーーっ！

譲二　ふん。そんな猿芝居の懺悔なんか、何の値打ちもねえよ！　まったく何なんだよ。おっさんが憐子の親父さんを死なせて、そんで今度はおっさんが死のうとしている。一体次は誰が死ぬ番なんだ。この責任は誰がとるってんだよ！

結城　ああ。我々世代の責任だろうなあ。

憐子　おじさん。立ちなよ！

結城　あ、ああー？

憐子　おじさん。世間に未練があって、独りぼっちで死ぬのが怖くて、冷たい海の底から這い上がってきたんだろう？

結城　ああ、どうだったろうなあ…。

憐子　おじさん、ここらで運命を変えようや！

結城　えっ。運命を変えるって？

憐子　私の父は運命に負けた。でもおじさんは生きている。おじさんはバブル崩壊で、命を亡くした人の分まで生きるべきだ！　（と、ドラムのスティックを突き着け）ロックンロール！

結城　（スティックを掴み）ああ。ロックンロール…。

譲二　へへっ。何か知らねーがいい雰囲気なってきたぜ。（と、携帯電話をプッシュ）あ、俺。JOGI(G)。セッティングまだだろ？　こっちにドラムの一式持ってきてくれねえ。あ、いま居る所？　「自由の女神像」が見える公園の端っこ…赤い自販機あるから分からるよ…あーっ！　ライブは午後からだろう。充分間合うよ？　いいからつべこべ言わねーで持って来ーい！

と、ギターのチューニングを始める。

結城、シャツを脱いで上着を羽織る。

下手から、若い男と老人がドラムセットを抱えて現る。

年配の男　譲二。どこ置きゃいいんだ？

譲二　あーっ。裕也さーん！

年配の男　何が裕也さーんだ。爺を使いっぱに使いやがって。まったく敬老精神がねえ野郎だぜ！

譲二　へへっ。どーもどーも、有り難たーす！

と、譲二が年配の男にへいこらする。
年配の男はロック界の大物らしい。
結城が若い男とドラムを設置する。
自販機を背にした憐子が語り出す。

憐子　私はあの日。六本木の「ジュリアナ東京」に繰り出して羽根の扇子を閃かせて、バトルダンスに踊り狂っていた。そして、帰宅した私を待っていたのは、自ら命を絶って変わり果てた、大好きな父との対面だった。私が出かけていなければ、父は死なじに済んだのに。父は家族のために死んだ。でも家族に必要なのは金じゃない。金が無くても生活が苦しくても、父が生きていれば幸せだった…。なのにそれなのに、もう取り戻せないのに、私は全てを金のせいにして、大好きな歌を捨てて、しゃかりに風俗嬢で金を稼いで…　私は一

体何をしたかったんだろう？　こんなの全然生きてない。生きるってなに？　人生ってなんなの？　そんなの知るもんか！　私は音楽をやりたい！　大好きな歌を思いっきり歌いたいんだーっ！

と、憐子が静かにベンチに戻る。

結城、ドラムの前に座り、スティックを見つめる。

結城　私は何んで、これを握っているんだろう？　会社のデスクに隠していたドラムのスティック。二度と握ることが無かったのに、何故かこれを鞄に入れた、特に意味はなかったんだ。多分…。そうだ。彼女が自販機の下に五百円玉を落としたからだ。いや、そうだろうか？　そうじゃない。彼がドラムを運ばせたからだ…。

クワーッ。クワーッ！　鋭いカモメの声。

結城　（空を見上げて）カモメー。悠々と空を飛びやがって、お前たちは何て自由なんだ。私は空を飛ぶ羽を失って、０になってしまった。でもこの解放された気分は何んだろう？　そうか、０は何ものにも縛られない…０は自由なんだ！　あはははは。０だ０だ０だ０だーっ！　カモメーっ！　私は０になった

んだよーっ！　（と、スティックの両手をＶ字に突き上げる）

憐子　おじさん。何が０なのよーっ！

譲二　死に損なって、狂ったんのか？

結城　ふん。洟垂れの餓鬼に分かって堪るかい！

憐子　何よ。急に元気になっちゃって！

譲二　おっさん。何だか知らねえが、そろそろ行くぜっ！

結城　ああ。何時でもいいが何をやるんだ？

譲二　一九六九年、ロックの魂は死んだ。そんで一九八九年にバブルが弾けた…。

結城　あれか。何時でもチェックアウト出来るが、そこから抜け出す事は出来ない！

譲二　おっさん。行くぜ！　（と、ギターを爪弾く）

結城がドラムを叩き、「ホテルカリフォルニア」の演奏が始まる。

ピー、ピー、ピー、ピー。ベンチのポケベルが鳴る。

憐子、携帯に番号を打ち込みプッシュ。

憐子　もしもし。結城さんのお宅ですか？　はい。演奏が聞こえますか？　えーえ、ご主人がドラム叩いてるんですよー。えっ。場所ですか？　お台場の海浜公園ですよー。え、何番地かって…そんなの分かりませんよー。分からないけど…ええと０…そう０よ。ここは東京０番地ですよーっ！

憐子　もしもーし。聞こないんですけど。えっ、いつまでやってるかって？　夜までやってますよー。え、ええー。元気元気、大元気ですよー。えっ、お嬢さんと一緒に？　どうぞどうぞ。いらしてくださーい！

譲二　憐子、歌え。歌うんだっ！

憐子、携帯をマイクに代えて、「ホテルカリフォルニア」を熱唱する。
憐子の頬に止めどなく涙が流れる。
演奏が終わり、万来の拍手に包まれる。
憐子と譲二がドラムの機材を持って退場する。
結城が自販機にコインを投入し、缶コーラを取り出しゆっくり飲み干す。
クワーッ、クワーッ、クワーッ！
と、一斉にユリカモメの群が天空に舞い上がる。
越冬を終えて北国に旅立ったのだ。

結城　（見上げて）カモメ…。

と、ボックスに空き缶を放り、ロックのライブに背を向け、北に飛び去るユリカモメを追って歩み出す。

心なし足取りは軽やかに見える。

―幕―